

V. ウルフの『歴 年』

住本 哲子

On Virginia Woolf's *Years*

by

Akiko SUMIMOTO

1

The Years (1937) は、ウルフ (Virginia Woolf) の生前に発表された最後の小説である。日記によれば、ウルフがエッセイ・ノヴェルとして、*The Pargiters* の執筆を思い立ったのが1932年11月、⁽¹⁾ *The Years* として脱稿したのが1936年3月である。⁽²⁾ 完成までに、実に3年数ヶ月もの歳月を要したことになる。題名も最終的に *The Years* に決まるまでに何度も変わった。*The Pargiters* (1932.11.2)、⁽³⁾ *Here and Now* (1933. 9. 2)、⁽⁴⁾ *Music or Dawn* (1934. 8. 17)、⁽⁵⁾ *Sons and Daughters* または *Daughters and Sons* (1934. 10. 2)、⁽⁶⁾ *Ordinary People* ⁽⁷⁾ (1934. 12. 30)、*The Years* (1935. 9. 5) ⁽⁸⁾ というふうにウルフは新しい題名を思いつくたびに改題した。

The Years は年代記風の構成をとっているが、*The Forsyte Saga* と異なり、パージター一家の単なる年代記ではない。世の中の推移や人物の運命の転変といった外的世界に、最初ウルフの関心が向けられていたことは事実である。日記 (1932. 12. 19) の中でウルフは、'Of course this is external; but there's a good deal of gold—more than I'd thought—in externality.'⁽⁹⁾ と述べている。この日記の言葉から、ウルフが *The Waves* (1931) の内的世界から離れ外的世界へ向かおうとしたことがわかる。登場人物の内的独白、即ち内的世界への沈潜を試みたウルフは、*The Years* では外的世界へ関心を向けたのである。しかしながら外的世界は *The Years* の中心主題となることができなかった。次の日記 (1933. 4. 25) は制作意図の変化を明確に示しているので興味深い。

I want to give the whole of the present society--nothing less: facts as well as the vision. And to combine them both. I mean, *The Waves* going on simultaneously with *Night and Day*.⁽¹⁰⁾

外的世界に注目し 'novel of fact' を書こうとしたのであるが、内的世界を排除することは不可能であった。それでは内的世界と外的世界とをどのように提示するのか。事実とヴィジョンの結合とは何を意味するのか。この日記によれば、それは *The Waves* と *Night and Day* (1919) とを同時に進ませることを意味する。*The Waves* においてヴィジョンの小説を試みたウルフが初期の小説 *Night and Day* の外的世界を志向しようとしたのである。*The Years* は *The Waves* と *Night and Day* が巧みに融合したものでなければならぬ。相互に均衡を保持した状態で事実とヴィジョンとを結合させようとウルフは試みた。しかしそれは容易な実験ではなかった。

2

The Years は「1880年」から1891年, 1907年, 1908年, 1910年, 1911年, 1913年, 1914年, 1917年, 1918年を経て, おそらく1930年代を意味する「現代」に至る11の章から成っている。この物語は, 退役大佐パージター (Abel Pargiter) の一家を中心に展開する。1880年4月, アバコーン・テラス (Abercorn Terrace) の家では, パージター夫人が重い病の床についている。22才頃で美しくはないが健康で快活な長女のエリナ (Eleanor), を中心とする, エドワード (Edward), モリス (Morris) ミリー (Milly), ディリア (Delia), マーティン (Martin), ローズ (Rose) のパージター家の生活が描かれる。パージター夫人の葬式の場面でこの章は終る。

次の章は1891年10月, 成人した子供達は皆アバコーン・テラスの家を離れ, それぞれ独立した生活を営む。アバコーン・テラスの家では独身のエリナひとりが父と共に住んでいる。パネル (Parnell) の死がディグビー卿 (Sir Digby) 夫妻やパージター氏の死の前奏曲となっている。1907年夏, ディグビー卿の一家の幸福な生活が描かれる。1908年春, ディグビー卿夫妻の死後, ブラウン・ストリート (Browne Street) にある彼等の家は売られることになる。1910年の章では, 40才すぎてまだ独身のローズがテムズ河畔にある貧民街に住むマギー (Maggie) とセアラ (Sara) を訪れ, セアラをある会合に連れ出す。そこでエリナやマーティンや伯爵夫人となっているキティ (Kitty) 等と会い, ひと時を一緒に過ごす。エドワード7世の死を告げる, 'The King's dead!' ⁽¹¹⁾ という言葉でこの章は終わっている。1911年8月, パージター氏の死後, アバコーン・テラスの家はとざされる。ウィッターリング (Wittering) にあるモリスの義母の家を訪れたエリナは, しきりと死を意識する。「1880年」の章では, 22才頃で美しくはないが健康で快活な女性として登場したエリナも, この時既に55才となっていた。額に刻まれた深いしわは, 彼女が老令へと向いつつあることを明白に物語っていた。'Things pass, things change... And where are we going? Where? Where?' ⁽¹²⁾ という彼女の言葉は死の不安を示しているといえよう。アバコーン・テラスの家はついに売りに出されることになり, 40年もの長い間家政婦としてパージター家の人々の世話をしてきたクロスビー (Crosby) もこの家から去って行く。老犬を抱いたクロスビーを見送るエリナの感慨が淡々と描かれる。1914年春, マーティンはセアラ, マギーに再会する。その晩, グローヴナ・スクエア (Grovenor Square) のキティ邸で催されたパーティーに出る。1917年冬, 戦争が激しさを加え空襲に絶え間なくおびやかされる。恐怖と不安の中で催されたマギー夫妻の夕食会にのぞむエリナ。1918年, 年老いたクロスビーが終戦を告げる砲声と警笛を耳にする場面で終わっている。「現代」としての最終章は最も長い章となっている。夏の日夜, ディリアの催すパーティーでパージター家の人々が再会する, モリスの娘のペギー (Peggy) と共に姿をあらわすエリナをはじめとして, ミリー夫妻, マギー夫妻, エドワード, マーティン, ローズ, セアラとニコラス, キティ, モリスの息子ノース等が10数年ぶりに一堂に会する。夕方から始まったパーティーは夜明けと共に終り, 皆は退出する。

3

The Years の構成は *To the Lighthouse* (1927) に似ていると思う。*To the Lighthouse* は I. The Window, II. Time Passes, III. The Lighthouse の3章から成る。*The Years* は11章から成ってはいるが, 内容的には I. 「1880年」, II. 1891年」～「1918年」,

Ⅲ. 「現代」の3章に分けることができる。時間的にはⅠ., Ⅱ. が過去でⅢが現在である。

「1880年」から「1917年」までのほとんどの章において、死が暗い影を投げかけている。パージター夫人の死(1880年), をはじめとして, パーネルの死(1891年), ディグビー卿夫妻の死(1908年), エドワード7世の死(1910年), パージター氏の死(1911年)が次々と起り, そして戦争(1917年)でこの暗い死のフーガは最高潮に達する。処女作 *The Voyage Out* (1915) をはじめとしてウルフの小説には死の意識がみられるとはいえ, この *The Years* において死の影が強く感ぜられるのはどうしてだろうか。ひとつには, *The Years* 制作当時彼女の身近な人々の死亡が相次いで起ったことをあげることができると思われる。アーノルド・ベネット (Arnold Bennett), リットン・ストレイチー (Lytton Strachey), ローズ・ディキンソン (Lowes Dickinson), ジョン・ゴールズワージー (John Galsworthy), ステラ・ベンソン (Stella Benson), ロージャー・フライ (Roger Fry)等が次々とこの世を去っている。またこの物語の中で設定された1880年から1930年代に至る時代的背景も考えねばならないと思う。第1次世界大戦を契機として, ヴィクトリア朝以来の長い伝統が崩壊し始め, 混乱と不安の時代を迎える。そして戦後10数年経て, やっと新しい世界の誕生をみるのである。即ち, 古い世界の崩壊の後に新しい世界の出現をみるのである。

最後の章「現代」は最も長い章であるが, 時間的には夕方から夜明けまでの10数時間の出来事にすぎない。これは *Mrs. Dalloway* (1925) がある1日の午前10時頃からその夜半近くまでの10数時間の物語であるのと似ている。*The Years* の終章も *Mrs. Dalloway* もパーティーに集まった人々の交差を描出している。そして女主人公であるエリナもクラリッサも, 人生について沈思する。唯ひとつだけ違っている点がある。*Mrs. Dalloway* が真夜中で終わっているのに対し, *The Years* が夜明けで終わっている点である。これは単なる時間的な差にとどまらず, もっと深い意味があることをわれわれは読みとらねばならない。

Mrs. Dalloway の最後の場面をみてみよう。クラリッサはパーティーの半ばにひとり人々の間からぬけ出して, 小部屋で人生について考える。

The clock began striking. The young man had killed himself; but she did not pity him; with the clock striking the hour, one, two, three, she did not pity him, with all this going on. There! the old lady had put out her light! the whole house was dark now with this going on, she repeated, and the words came to her, Fear no more the heat of the sun. She must go back to them. But what an extraordinary night! She felt somehow very like him--the young man who had killed himself. She felt glad that he had done it; thrown it away while they went on living. The clock was striking. The leaden circles dissolved in the air. But she must go back. (13)

こよなく生を愛するクラリッサは暗黒の死を極度に恐れた。しかしこの最後の場面では死の容認へと向かうクラリッサの姿が美しい静けさの中に描かれている。未知の青年セプティマス (Septimus) の自殺の知らせは, 生と死の境界を消す間接的役割を果す。窓の外にふと目を向けたクラリッサは, 反対側の部屋にいる老婦人の姿を見る。この老婦人の姿こそ生と死の境界を消す直接的なきっかけとなっていると思われる。死と対峙したクラリッサは再びパーティーへと戻る。

大沢氏が指摘しているように、生をその最後の余燼まで燃やしつくして死ぬこと、死を通して再び生に直面するという主題の展開をまえにして、*Mrs. Dalloway* [は終る。⁽¹⁴⁾ ウルフは *The Years* において再びこの主題をとりあげ生と死の問題を追したのである。

パーティーの喧騒の中で、エリナはいいしれぬ幸福感を味わう。

There must be another life, she thought, sinking back into her chair, exasperated. Not in dreams; but here and now, in this room, with living people. She felt as if she were standing on the edge of a precipice with her hair blown back; she was about to grasp something that just evaded her. There must be another life, here and now, she repeated. This is too short, too broken. We know nothing, even about ourselves. We're only just beginning, she thought, to understand, here and there. . . . She held her hands hollowed; she felt that she wanted to enclose the present moment; to make it stay; to fill it fuller and fuller, with the past, the present and the future, until it shone, whole, bright, deep with understanding. ⁽¹⁵⁾

'a life of seventy odd years' ⁽¹⁶⁾ をふりかえり人生の謎を解こうとしつつ、知らぬ間にエリナは少しの間まどろむ。そして瞬時の眠りから覚めた時、新しい生を直観的に知覚する。しかしこの場面ではまだ新しい生の把握にまでは至らない。

夕方から始まったパーティーも夜明けと共にその幕を閉じようとしている。ディリアは窓の所へ行き、カーテンをあける。美しい夜明けであった。木々の間をわたる。じゅずかけばとの声に耳を傾けながら、エリナはしばし窓際にたたずむ。

She saw an empty milk jug and leaves falling. Then it had been autumn. Now it was summer. ⁽¹⁷⁾

彼女の心の中では、約40年前の秋(1891年)のことでと現在とが奇妙に重なり合う。'Take two coos, Taffy, take two coos . . . tak . . .'⁽¹⁸⁾ としきりにさえずるじゅずかけばとの鳴き声は、過去と現在の境界を消失させる。

エリナは窓外のある光景に目をとめる。

She was watching a taxi that was gliding slowly round the square. It stopped in front of a house two doors down. . . . A young man had got out; he paid the driver. Then a girl in a tweed travelling suit followed him. He fitted his latch-key to the door. "There," Eleanor murmured, as he opened the door and they stood for a moment on the threshold. "There!" she repeated, as the door shut with a little thud behind them.

Then she turned round into the room, "And now?" she said. . . . "And now?" she asked, holding out her hands to him. ⁽¹⁹⁾

この一見何でもない1組の若い男女の姿は、エリナの心に深い感動を与える。*The Years* の終章の最後の場面であるこの箇所は、*A Room Of One's Own* (1929) の終章の始めの箇

所と非常に似ている。 *A Room Of One's Own* の中で、ウルフは 'the ordinary sight of two people getting into a cab'⁽²⁰⁾ が何かしら心を強くとらえたと言っている。過去、現在、未来の集約ともいべき現在の瞬間において、エリナは輝かしい新しい生の息吹きを感じ、恍惚の境地にひたるのである。新しい生を求め続けたエリナは、ついに新しい生を把握することができた。

エリナはヴィジョンを得た。その時これを祝福するかのように、太陽がのぼった。

The sun had risen, and the sky above the houses wore an air of extraordinary beauty, simplicity and peace.⁽²¹⁾

この日の出の光景はエリナの内的啓示と見事に調和している。

4

「詩、現実、喜劇、ドラマ、物語、心理描写」⁽²²⁾ すべてが合一したはずの 900 頁の長編の草稿を完成したのが 1934 年 9 月 30 日であった。⁽²³⁾ それ以後 ウルフは何度も書き直す。彼女は何度もたえがたい頭痛に悩まされ、そのたびに書くのを中断し、またよくなると書き続けるといったことをくり返す。3 年数ヶ月もの年月をかけ心魂を傾けた結果、*The Years* をやっと完成することができた。次に示す日記 (1936. 11. 10) は *The Years* 完成に至るまでのウルフの激しい苦闘を如実に物語っている。

I wonder if anyone has ever suffered so much from a book as I have from *The Years*. Once out I will never look at it again. It's like a long childbirth.⁽²⁴⁾

とはいえ *The Years* の完成はウルフにとって大きな喜びであった。

There is no need whatever in my opinion to be unhappy about *The Years*. It seems to me to come off at the end. Anyhow, to be a taut, real, strenuous book. Just finished; and feel a little exalted.⁽²⁵⁾

ひとつの作品を書き終った時、いつもウルフは他人の評価を気にした。*The Years* を書き上げた時もそうであった。思いがけない激讃の言葉を夫のレナード (Leonard Woolf) から受けたウルフは、その喜びを日記 (1936. 11. 3) の中で、'Miracle will never cease — L. actually liked *The Years*!'⁽²⁶⁾ と書きとめている。そしてまた 'a most remarkable book'⁽²⁷⁾ という夫の言葉はともすれば絶望的になりがちなウルフの心を慰め励ましてくれたのであった。

The Years 出版後、各方面から批評が寄せられた。彼等の批評にウルフは一喜一憂する。それでは日記をてがかりにして、*The Years* に対する当時の評価はどうであったかみてみよう。

T. L. S. の *The Years* に対する評価は痛烈であったが、セリンコート (de Selincourt) は *The Years* の価値を認め、'a creative, a constructive book' であると明言した。⁽²⁸⁾ *The Times* は *The Years* を傑作であると賞讃した。⁽²⁹⁾ *The Years* の好評なのに気をよくしていたウルフは、エドウィン・ミュア (Edwin Muir)、スコット・ジェイムズ (Scott

James) の2人の苛酷な評価によって悲嘆と絶望にうちめされる。ウルフは日記(1937. 4. 2)の中で、'E. M. says *The Years* is dead and disappointing. So in effect did S. James.'⁽³⁰⁾と述べている。あれほど心を砕いて制作した作品が失敗作であると攻撃された時のウルフの気持はどうであったか。

ウルフはこの打撃から容易に立ち直ることができなかった。同じ頃、*The Empire Review* に載った 'the best of my book'⁽³¹⁾ という推賞の言葉も、エドウィン・ミュア、スコット・ジェイムズの2人から受けた心の痛手を和らげてはくれなかった。やはりこの頃、エドウィン・ミュアやスコット・ジェイムズとは全く対照的な評価がメイナード (Maynard) によってなされる。'Maynard thinks *The Years* my best book'⁽³²⁾ と日記(1937. 4. 4)に記しつつも当惑しているウルフの姿が目に見え浮ぶ。

以上みてきたように、*The Years* 発表当時ウルフに寄せられた評価はさまざまであったが、最高傑作という見方と失敗とみる見方の二つに分れた、それでは次にウルフの死後、*The Years* の評価はどのようであったかを少しみてみよう。

ディシス (David Daiches) は *Mrs. Dalloway* や *To the Lighthouse* にくらべてみると *The Years* は見劣りがすると考える。⁽³³⁾ ジョウン・ベネット (Joan Bennett) は *The Years* の構成上の欠陥を指摘し、'not wholly successful' と断言している。⁽³⁴⁾ ジョンストン (J. K. Johnstone) は 'Virginia Woolf's last two novels are not as successful or as solidly constructed as *Mrs. Dalloway*, *To the Lighthouse*, and *The Waves*.'⁽³⁵⁾ と批判の言葉をあびせている。シェファー (S. O. Schaefer) もまた *The Years* を失敗作であると述べウルフを攻撃している。⁽³⁶⁾ ディシスをはじめとするこれらの批評家と対照的な意見を持つのは、ハフリー (James Hafley) とマーダー (Herbert Marder) の2人である。ハフリーは *The Years* をウルフの最高傑作であると断言し、'Possibly the best, and certainly one of the most interesting, of Virginia Woolf's novels'⁽³⁷⁾ と述べている。マーダーもハフリー同様、*The Years* の価値を高く評価し、'*The Years* is greater in scope, and more consistent in tone, than *To the Lighthouse*.'⁽³⁸⁾ と明言している。

このようにひとつの作品の評価をめぐる、全く対照的な意見が出るのもウルフ文学の難解さからくるのかもしれない。

参 考 文 献

- (1) V. Woolf, *A Writer's Diary* (London, 1959), p. 189.
- (2) *Ibid.*, p. 267.
- (3) *Ibid.*, p. 189.
- (4) *Ibid.*, p. 211.
- (5) *Ibid.*, p. 222.
- (6) *Ibid.*, p. 226.
- (7) *Ibid.*, p. 234.
- (8) *Ibid.*, p. 253.
- (9) *Ibid.*, p. 190.
- (10) *Ibid.*, p. 197.
- (11) V. Woolf, *The Years* (London, 1958), p. 205.

- (12) *Ibid.*, p. 229.
- (13) V. Woolf, *Mrs. Dalloway* (London, 1963), pp. 204 - 205.
- (14) 大沢実著 『時間と死の芸術』 (南雲堂, 1965), pp. 205 - 206.
- (15) *The Years*, pp. 461 - 462.
- (16) *Ibid.*, p. 395.
- (17) *Ibid.*, p. 468.
- (18) *Ibid.*, p. 467.
- これより前「1891年」の章でエリナは、じゅずかけばとの ‘Take two coos, Taffy; take two coos, Taffy; tak. . .’ (p. 123) という鳴き声を聞いたことがあった。
- (19) *Ibid.*, p. 469.
- (20) V. Woolf, *A Room Of One's Own* (Penguin Book, 1963), p. 95.
- (21) *The Years*, p. 469.
- (22) *A Writer's Diary*, p. 222 (1934. 8. 21)
- (23) *Ibid.*, p. 225.
- (24) *Ibid.*, p. 273.
- (25) *Ibid.*, (1936. 11. 30)
- (26) *Ibid.*, p. 270.
- (27) *Ibid.*, p. 272. (1936. 11. 5)
- (28) *Ibid.*, p. 278. (1937. 3. 14)
- (29) *Ibid.*, p. 279. (1937. 3. 19)
- (30) *Ibid.*, p. 280. (1937. 4. 2)
- (31) *Ibid.*
- (32) *Ibid.*, p. 281. (1937. 4. 4)
- (33) David Daiches, *Virginia Woolf* (Norfolk, 1963), p. 120.
- (34) Joan Bennett, *Virginia Woolf; Her Art as a Novelist* (Cambridge U. P., 1964), p. 38.
- (35) J. K. Johnstone, *The Bloomsbury Group* (New York, 1963), p. 368.
- (36) J. O. Schaefer, *The Three-Fold Nature Of Reality in the Novels of Virginia Woolf* (The Hague, 1965), p. 169.
- (37) James Hafley, *The Glass Roof; Virginia Woolf as Novelist* (New York, 1963), pp. 132, 145.
- (38) Herbert Marder, *Feminism and Art: A Study of Virginia Woolf* (The University of Chicago Press, 1968), p. 154.